

二〇一三年一月八日

人気なき城址秋風吹くばかり
朱を極む紅葉句帳の栞とす
雲一つなき中天に月冴ゆる
藪の中落葉に沈む一羅漢
河原石あらはとなりて柳散る
寒に入る百の味噌樽眠る蔵

二〇一三年一月七日

降りやまぬ落葉なれども掃きにけり
瞬くは谷戸の底ひの冬灯
山の辺の道ゆき柿の無人店

二〇一三年一月六日

十三仏つるべ落としの日を背負ふ
神留守の石庭なれど掃き清む
余生得てほ句に親しむ文化の日
公園は廃校跡てふ冬桜
鐘楼を抱きて法の山粧ふ

二〇一三年一月五日

水上バス小春の運河二タ分けす
古城址に佇ちて一望柿の里

菜々

満天

はく子

有香

ぼんこ

なつき

よう子

有香

雅流

菜々

満天

宏虎

あさこ

有香

はく子

菜々

手術前看護師の笑み温かし

閨門を出でてより澄む淀の水

秋霖に涙目となる街路灯

二〇一三年一月四日

みくまりの早瀬となりて水澄まず
譲られし優先座席温かし
大川へ小舟漕ぎだす小春かな
陽当たれる瓦礫の山に残る虫

二〇一三年一月三日

このあたり古墳銀座や柿たわわ
澄む水に墨の溶け出す護符流し
能勢電の傾く里の秋深し
錦秋の白山林道七曲がり

二〇一三年一月二日

同胞を悼みて集ふ秋天下
救急車向ひに止まる夜寒かな
一湾を占めてひろがる牡蠣筏
裏鬼門花ひひらぎの句ひけり

よう子

満天

宏虎

よし子

雅流

はく子

三刀

菜々

なつき

よし子

はく子

あさこ

満天

あさこ

宏虎

毎日句会みのる選・二〇一三年一月二日